

ほろにか

平成30年10月15日
全国卸売酒販組合中央会

「サマータイム」

東北支部長 山口 哲行

東京オリンピック・パラリンピックに向けた暑さ対策として急浮上した「サマータイム」。唐突な感じは否めないが、日本でも過去に実施されたことがあるようだ。それは、1948年（昭和23年）から51年（昭和26年）まで4シーズンにわたってGHQ（連合軍総司令部）の指示で施行された「夏時刻法」だ。当時の電力不足への対応などという説もあるが、実際はGHQが占領行政を行うために、本国の制度と合わせるというのが主たる目的らしい。

サマータイムがスタートした時の新聞には、「目が覚めたら夏時刻 時計の針は進めましたか。」とか「今日からいよいよ夏時刻、時計の針は進めましたか。」などという記事が掲載されている。また、漫画「サザエさん」でもサザエが「さあ、今日からサンマータイムだ。」と言いながら時計を進めるシーンが出てくる。

昭和23年当時は単純にみんな揃って時計を進めればサマータイムになったが、今どきは「時計を進める」といっても、何をどう進めたらよいやら・・・。普通の時計は大丈夫だろうが、電波時計はどうするんだろう？ スマホは？ パソコンの時計は面倒だから放っておいても大丈夫？ブルーレイデッキの予約は？など心配が絶えない。

個人的にはまあ何とかするにしても、企業や社会インフラに関するコンピュータシステムは大丈夫なのか？ 例えばモバイル Suica は、改札を入った時刻と改札を出た時刻を記録するが、改札を出た時刻が入った時刻よりも前だった時、ちゃんと動くのかと言った問題が大小出てくるに違いない（素人考えだが）。

コンピュータの日付時刻と言えば「2000年問題」を思い出すが、「2000年問題」はコンピュータシステムの内部で、日付を扱う際、「西暦」の下2桁のみを

取り扱い、上位2桁を省略しているのが原因で「2000年」が内部で「00年」となるので、これを「1900年」と見なしてしまい、誤作動を起こす可能性があると言うお話し。この時は、割と問題点が明確だったし、コンピュータネットワークも現在と比べると、とてもささやかなものだったが、でも大騒ぎだった。その「2000年問題」当時と比べて、大きく変わったのは「世の中のコンピュータは、そのほとんどが単独では動いていない。」ということだ。それぞれのシステムの整合性がとれるかどうか、甚だ疑問だ。

「でも、アメリカではちゃんとやってるよね。」という極めてもったもな意見もあるが、あちらは第二次世界大戦中からずっとやっている。あなたのwindowsパソコンのタイムゾーンを「太平洋標準時」に設定してみよう。すると、『夏時間は2018年11月4日の2時に終了します。時計はその時点で1時間戻るように設定されています。』と教えてくれる。

コンピュータの普及と進化に合わせて、長い時間をかけ、それぞれのコンピュータにしっかり組み込まれている。もちろん、お金と時間をかければ日本の時間も「太平洋標準時」並みに出来るだろうが、来年6月スタートで、しかも2年限定というのでは、費用対効果を考えるとなんだかめんどろだなぁと思ってしまう。ましてや、消費税増税と軽減税率の対応で頭が痛いのに。

また、サマータイムは体にもよくない。冒頭の終戦直後のサマータイムは、サンフランシスコ講和条約締結に合わせて廃止されたが、生活のサイクルが狂って体が怠いとの評価が多かった。現在サマータイムを実施しているEUでも、その点が問題視され廃止が検討されているそうだ。

東京オリパラの暑さ対策のためと言うなら、マラソンは午前三時にスタートすれば良いことだ。いっそオリンピックを10月にやればいいのだが、それはちょっとムリらしい。昔の東京五輪は真夏の猛暑を避けて10月開催だったが、これでは視聴率を稼げるアメリカのメジャースポーツのクライマックスと被ってしまうから、それを避けると7月、8月の開催しかないというお話らしい。

結局、国民ファースト < アスリートファースト < アメリカのテレビ局ファーストという力関係なのだろう。